



連歌三問卷



4

伊地知文庫  
文庫20  
220





くもる出さるるは 作井の 波舟の中へくは君

柳の山と下中しをわすれし

此のそらにゆく 葉のまじり連舟と名付き後  
用意せよと連舟 く名付き るあんなの舟  
あまの く 定 成と そ 清 澄 り 取 生 る る 海  
ま ま れ よ い く

雪霜は花より 不 行 春也

脇皮沙門

敷乃後いそりそり い

水乃月入 あ ま は け く 定 長

夜乃宿いそり あ ま は け く 定 長

山より あ ま は け く 定 長

限 あ ま は け く 定 長

こ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長

あ あ ま は け く 定 長





河朔の... 捨く... 意を... 行...  
た... 衣... 潤... 他言... 捨余の  
... 捨... 祇云... 命...  
... 捨... 命... 命...  
... 命... 命... 命...

東一

... 捨... 命... 命... 命...  
... 命... 命... 命... 命...  
... 命... 命... 命... 命...  
... 命... 命... 命... 命...

... 捨... 命... 命... 命...  
... 命... 命... 命... 命...  
... 命... 命... 命... 命...  
... 命... 命... 命... 命...

東二

... 捨... 命... 命... 命...

賤しほし室乃幸乃茶目拈く 寢  
是くぬ人より是は心あて 寢  
半まて水乃うも徳海の日よ 寢  
祇是くぬ乃連奇の御中やこ乃の事  
えりて冷きく 後去りては清白し  
是く取れりて是の作云是くぬ人よ  
人の事と夜合の事 雨降るは昔より  
是くおの事と御中と三年と是く  
御中と御中と御中と御中と御中と  
三年よぬ是くは 祇作の御中  
云在月と是く法拈乃清乃幸乃茶拈乃事

おの事と御中と御中と御中と御中と御中と  
是くは 祇作の御中  
云在月と是く法拈乃清乃幸乃茶拈乃事  
おの事と御中と御中と御中と御中と御中と  
是くは 祇作の御中  
云在月と是く法拈乃清乃幸乃茶拈乃事  
おの事と御中と御中と御中と御中と御中と  
是くは 祇作の御中  
云在月と是く法拈乃清乃幸乃茶拈乃事  
おの事と御中と御中と御中と御中と御中と  
是くは 祇作の御中  
云在月と是く法拈乃清乃幸乃茶拈乃事





祇を、同と祇作を人ハシる先連奇は其を  
と云書是奇よ、其の奇は其の奇  
人ハシる奇は其の奇よ、其の奇は其の奇

未五

と云書是奇よ、其の奇は其の奇  
人ハシる奇は其の奇よ、其の奇は其の奇  
と云書是奇よ、其の奇は其の奇  
人ハシる奇は其の奇よ、其の奇は其の奇  
と云書是奇よ、其の奇は其の奇  
人ハシる奇は其の奇よ、其の奇は其の奇

先傳中は、其の奇は其の奇  
と云書是奇よ、其の奇は其の奇  
人ハシる奇は其の奇よ、其の奇は其の奇  
と云書是奇よ、其の奇は其の奇  
人ハシる奇は其の奇よ、其の奇は其の奇  
と云書是奇よ、其の奇は其の奇  
人ハシる奇は其の奇よ、其の奇は其の奇

未五





くして石裏ぬ人老伊はら以らん金云々  
う山一も遠く長作云其の塚乃清乃定ら歌と  
何よりい々南世とて回章一頁は祇回々祇  
云玉らう乃連奇人よふらうとて付は長音をそ  
とて南世とて人れんよふらうとて人偏乃祇云  
とれと昔いふ人きまて人偏忠人忠人うと  
とれらう塚とてう中は祇作回々

未八

會の似る入達をう人

物とて此よりううとて祇云

うとて是は何道の前へ妙の世中人

祇  
忠

嘆息のうらみ乃とていゆて

長作云物とて何よりいうらに余は此ら孫

と在ゆく人ふ要意よいゆとて祇音を捨付

及指とて此よりいゆ鐘忠人忠とていゆ

地毎に此よりうう音のいゆ余は此ら

鐘よ此よりいゆ長作とていゆ乃とて無常類是

十徳院隔廿二のあり余は此ら其の上最京

何れにけり奇よいゆ余は此ら其の上最京

鐘乃此ら此ら外 祇作と世中のう奇乃とて

何れにけり奇よいゆ余は此ら其の上最京

うとて是は何道の前へ妙の世中人







落紅葉満庭乃又春一枝上乃春をたははせり  
と云く情に今成りうは春好くあはれし  
君よもしかたしと云くあせりては乃我も  
祇伝をきりしは連寄にせり世に心は  
南世別我にうけりは紅葉乃数と一乃我  
あはれと云くはあはれと云くは又あはれと云く  
沙へきと云く我と云くは又あはれと云く  
甲斐と云くは甲斐と云くはあはれと云く  
の月と云くは月と云くはあはれと云く

才十二

河ふく戸川乃水は月乃

いと秋乃秋伊と云くは乃神 祇  
別伝は乃金言と云くは乃神 長  
おとくは乃秋伊と云くは乃神 佑  
祇伝云くは乃秋伊と云くは乃神 佑  
いと秋乃秋伊と云くは乃神 佑  
新古今集は乃秋伊と云くは乃神 佑  
心は乃秋伊と云くは乃神 佑  
いと秋乃秋伊と云くは乃神 佑  
奥乃連隈川乃月と云くは乃神 佑









を繪書くや、相違なく長作房の筆の如し。其の  
てい、何れもこれに不審し、其の間にさういふ文字も  
あつたと思ふ。其の身上に角の字の去りて、  
父字のさういふて、その如く、  
弟十七

北の山に方より坤に

卯辰乃をさしけ道中にて

曉乃をさしけ乃声を

埋火といふなり

長作房の筆の如し、其の如く、卯辰乃をさし

何れもこれに不審し、其の間にさういふ文字もあつたと思ふ。

卯辰乃をさしけ道中にて、  
曉乃をさしけ乃声を、  
埋火といふなり、  
長作房の筆の如し、  
何れもこれに不審し、  
其の間にさういふ文字も  
あつたと思ふ。其の身上に  
角の字の去りて、父字の  
さういふて、その如く、  
弟十七





乃其意也若酒と為 目といふ時と様 諸君  
と其を其止らざるを色といふ中其意也其様  
いしけりしとせんまはまといふもや

第二十一

世といふもや。拾ふもや

拾ふもや 水海美いなるもや 祇

山吹といふもや 神といふもや 祇

外野といふもや 世といふもや 祇

長石といふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇

之身といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇

乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇

乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇  
乃其意也といふもや 拾ふもや 水海といふもや 拾ふもや 祇

第二十二

乃其意也といふもや 拾ふもや

乃其意也といふもや 拾ふもや 祇







の勢退く阿婆ハ切ハしやう、奇然祇也云云、  
退くはし、昔後分付る也、其故ハ、  
捨つるも、七女自こも、  
此と付るとも、  
習乃と云、  
亦より、父乃、  
前記、  
威之

第二十五

夏乃、

胡蝶、

道乃、

祇

五上乃、

佑

祇也、  
弟一義、  
乃、  
佛、  
祇、  
の、  
乃、



春を乃と昔  
しそいあま乃旅とらまふいそみゆゆ人むか  
橋乃敷まよあまなきいふちさういむのこハ  
ぬいこし情いこいほりゆりい祇儀感え思  
乃心ちら山口志く真たはりこいこわてあてう  
くはぶらあて人を能く何こも感え祇儀  
まういもの清白あまなきぬいけり文乃ま  
くあま入くこもまなきいふあまいふこ  
く文とふとあ記きくはあさくせし乃文乃  
敷ゆれいけりあ乃文のとこれまへさゆ同  
第廿七

雪乃山崎いゆくこもいれ  
あうくよん皆ゆりあふあハの月  
子あまゆりこも風乃さくこ  
伊よりま路のいれ 一 月 松 佑  
祇儀まよも祇の清白いこいよいこいもはまこ  
宗師師いひこいあまなきいれ我とあままゆり  
まゆりまよいさあゆりまゆりこいゆの乃あ文字  
いあまいあまいこいあまいあまいあまいあま  
のさくさういあまい山崎いゆりこいあまいあま  
伊月乃清白いゆりあまいあまいあまいあまい  
接人あま雪乃山崎いゆりこいあまいあまいあま

あけ目のしるしをいふ人よるせんや中余感之

才十八

うきうきとていふことか

詩人よほる人のとくくあて 祇

教法をほいけりていふ 長

直の女とていふ 佑

祇云よりいふは 祇

あけのしるし 祇

もや教 祇

いふ 祇

連奇 祇

京

初 祇

心 祇

あ 祇

け 祇

第廿九

色よしり 祇

い 祇

ま 祇

ま 祇

長 祇

声 祇

鳴 祇

け 祇

い 祇

ま 祇

ま 祇

あひめて相ころしき夢之山をこしそらく文目  
可やききくうの由はうの如きくころし相絶  
くはあ同じ祇云因志志母戸とまはつるよま  
漢のよ言はれり奇に志母をせよまより  
多志ハ地や地を人のこ道祇志感之祇志云  
今世の志母の清く水よまると言魂のまよま  
色よ地をりし付あいにあまこまよせなる山  
ころしに祇云一章は枕心かくうりくまはれし戸  
あまこ  
あけくくいとまよまのりあま  
志母山はういとまはれあひいとま 祇

おのれを志母をあらしお目  
年乃内は春ハ本より山里に 佐  
長作之志母を志母の志母はあけまは志母志母  
あま志母付あま戸聞あまはままはれはれま  
に志母もまはれ志母志母の志母は志母志母  
聞に甲まはれまはれ志母志母は志母志母志母  
まはれ志母志母志母志母志母志母志母志母  
連奇志母志母志母志母志母志母志母志母  
志母志母志母志母志母志母志母志母志母  
志母志母志母志母志母志母志母志母志母  
志母志母志母志母志母志母志母志母志母

ふゆりいしなげき 冬あけまけりいしなげ  
山軍よりけうくいよまはるいしなげ

第三十一

取も下そ乃 人と 人

おまけのなまはるいしなげ 祇

伊乃かつてたまきとけく日 長

いふまじいしなげ 油の月 佐

長作云米の難儀もいしなげ 幸いしなげ

まじいしなげ 幸いしなげ 取も下そ乃 人と 人

おまけのなまはるいしなげ 祇

伊乃かつてたまきとけく日 長

一向に捨くしなげの、かつてたまきとけく日 長  
絶く付らそと南せといこいこの神と云祇也  
袖乃月の清くいしなげ 幸いしなげ  
遠く捨捨遣よ 袖乃月 幸いしなげ  
取も下そ乃 人と 人

第三十二

石乃れぬ 神と 祇

夕乃らりく 祇 祇

風まはるいしなげの 長

三吉おやより 祇

長作云にあり水の清く承ふいしなげの祇者





新の難後にはけりあるを計り乃をたしきて  
ほく地とみせて持うくほくく石と1のほく  
伊年と1年感之祇石を石と1ほくして使はる  
らぬと何れもくしん若されば法は後より  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
と初に石と1年感之祇石と1ほくして使はる  
伊年と1年感之祇石を石と1ほくして使はる

第三十回

志乃乃石の宿くく田

魂乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる

持乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる

くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
志乃乃石の宿くく田  
魂乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる  
持乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
志乃乃石の宿くく田  
魂乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる  
持乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
志乃乃石の宿くく田  
魂乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる  
持乃石と1年感之祇石を石と1ほくして使はる

第二卷五

御乃玉乃えくやあし

ほししうしあよ葉かろのちか

何れぬしに葉のちかこしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし





山もも交時さうけくくはる美威く

赤く中丸

しりまうはくはくはく

得えそとしくくはくはくはくはく

くともはくはくはくはくはくはく

僅きもをくはくはくはくはく

昔はくはくはくはくはくはくはくはく

流りくはくはくはくはくはくはく

伴うくはくはくはくはくはくはく

地毎くはくはくはくはくはくはく

去んくはくはくはくはくはくはく

乃連奇きと心くはくはくはくはく  
くはくはくはくはくはくはくはくはく  
くはくはくはくはくはくはくはくはく  
くはくはくはくはくはくはくはくはく  
くはくはくはくはくはくはくはくはく

第四十

あうくはくはくはくはくはく

白あもくはくはくはくはくはく

くはくはくはくはくはくはくはく

出くはくはくはくはくはくはく

結云くはくはくはくはくはくはく





